岩波文庫

3050—3052

蜻蛉日記

喜多義勇校訂

岩波書店

昭和十七年十一月二日 第一刷發行
昭和二十三年三月十日 第三刷發行

蜻蛉日記

定價 五拾五圓

校訂者 喜多義勇

東京都千代田區神田一ッ橋岩波書店內
編集者 布川角左衞門

東京都千代田區神田一ッ橋二丁目三番地
發行者 岩波雄二郎

東京都千代田區神田錦町三丁目一番地
印刷者 井關好彥

發行所 東京都千代田區神田一ッ橋二ノ三 岩波書店
會員番號A一〇九〇〇四號

大同印刷・田中製本

岩波文庫
3050—3052

蜻蛉日記

喜多義勇校訂

岩波書店

凡例

一、本書は宮内省圖書寮御藏桂宮家本蜻蛉日記大型袋綴本三冊を底本とした。この本は畏くも　靈元天皇の御宸筆にかゝる題簽が附せられ、本文の書體も優雅にして整正、誠に尊貴なる寫本である。こゝに活字に移すに當り、假名を漢字に改めることは出來るだけ避け、句讀點の如きも最少限に留めた。但し、假名遣を正し、濁點を補ひ、漢字を當てる必要ある場合は假名は振假名として殘すことにした。

二、本文の不備を正すに當つては同系統の諸古寫本及び契沖阿闍梨校訂と傳へる諸寫本に依り、其の他先賢の研究の跡をたづね、私見を以てすることは最少限に留め、それら改訂の箇處には番號を附して底本の形を明かにし、必要に應じて改訂の由來を註記した。

三、和歌にして勅撰集に入るものは〇印を以て指摘し、詞書、文句の異同を記した。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

四、本文の理解に必要なる引用歌の類にして檢索し得たものは＊印を以て指示した。

五、「道綱母集」「傅大納言殿母上集」の二集は、亦何れも宮內省圖書寮御藏にかゝるもの、卷末歌集の研究資料として收載した。

六、卷末には「系圖」並に「日記歌並に引用歌索引」を附載した。

七、こゝに圖書寮御藏本を收めるに當り謄寫印刷の御許可を賜りたる御當局に對し謝意を表するものである。

昭和十七年六月五日

校訂者

目次

蜻蛉日記……七
上巻……九
中巻……八一
下巻……一六九
道綱母集……二六七
傳大納言殿母上集……二八九
解説……三〇七
日記歌並に引用歌索引……三一九
系圖……三三三

蜻蛉日記

蜻蛉日記 上

かくありしときすぎて世中にいとものはかなくとにもかくにもつかでよにふる人ありけり。かたちとても人にもにずこゝろたましひもあるにもあらでかうものゝやうにもあらであるもことわりとおもひつゝたゞふしおきあかしくらすまゝに世中におほかた古るものがたりのはじなどをみればよにおほかるそらごとだにあり、人にもあらぬみのうへまでかき日記しためづらしきさまにもありなん天下の人のしなたかきやと問はんためしにもせよかしとおぼゆるもすぎにしとしつきごろのこともおぼつかなかりければさてもありぬべきことなんおほかりける。

さてあはつけかりしすきごとどものそれはそれとしてかしはぎのこだかきわたりよりかくいはせんとおもふことありけり。れいの人は案内す

一ころ

二たりき

三あのけ

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

るたよりもしはなま女などしていはすることこそあれ、これはおやとお
ぼしき人にたはぶれにもまめやかにもほのめかしに、一便なきことといひつるをもしらずがほに馬にはひのりたる人してうちたゝかす。誰など
いはするにはおぼつかなからず、三さわいだればもてわづらひとり入れて
もてさわぐ。みれば紙などもれいのやうにもあらずいたらぬところなし
ときゝふるしたる手もあらじとおぼゆるまであしければいとぞあやしき。四
ありけることは

おとにのみきけばかなしなほととぎすことかたらはんとおもふこ五
ろあり

とばかりぞある。いかにかへりごとはすべくやあるなどさだむるほどに、六
古代なる人ありてなほとかしこまりてかゝすれば

かたらはん人なきさとにほととぎすかひなかるべきこゑなふるしそ

これをはじめにてまた〳〵もおこすれどかへりごともせざりければ又

一ひけき
二き
三きわひ
四さ
○風雅戀一女につかはしける（第二句「かひなし」）五ころ
六て
七さ
○風雅戀一返し

おぼつかなおとなきたきの水なれやゆくへもしらぬせをぞたづぬる

これを「いまこれより」といひたればしれたるやうなりや、かくぞある

ひとしれずいまや〳〵とまつほどにがへりこぬこそわびしかりけれ

とありければ、れいの人「かしこしをさ〳〵しきやうにもきこえんこそよからめ」とてさるべきひとしてあるべきにかゝせてやりつ。それをしもまめやかにうちよろこびてしげうかよはす。またそへたるふみみればはまちどりあともなぎさにふみみぬはわれをこすなみうちやけつらん[八]

このたびもれいのまめやかなるかへりごとする人あれば[九]まぎらはしつ。又もあり「まめやかなるやうにてあるもいとおもふやうなれどこのたびさへなうはいとつらうもあるべきかな」などまめぶみのはしにかきてそへたり。

いづれともわかぬ心はそへたれどこたびはさきにみぬ人のがり

八 もたす

九 そ

とあれどれいのまぎらはしつ。かゝればまめなることにて月日はすぐし一もつ。秋つかたになりにけり。そへたるふみに「心さかしらづいたるやうにみえつるうさになんねんじつれどいかなるにかあらん

しかのねもきこえぬ里にすみながらあやしくあはぬめをもみるかな

とあるかへりごと

たかさごのをのへ・わたりにすまふともしかさめぬべきめとはきかぬを

げにあやしのことや」とばかりなん。又ほどへて二

あふさかのせきやなかなかちかけれどこえわびぬればなげきてぞふる三

かへし

こえわぶるあふさかよりもおとにきくなこそをかたきせきとしらなん

一は、かり

三なるなり

○新千載愛三東三條入道攝政消息して侍りける返事に（第四句「なこそは高き」）

などいふ。まめぶみかよひ〳〵ていかなるあしたにかありけむ

ゆふぐれのながれくるまをまつほどになみだおほゐのかはとこそな[四]れ

かへし[リコト]

おもふことおほゐのかはのゆふぐれはこころ[五]にもあらずなかれこそすれ

また三日ばかりのあしたに

しのゝめにおきけるそらはおもほえであやしくつゆときえかへりつる

かへし

さだめなくきえかへりつる露よりもそらだのめするわれはなになり

かくてあるやうありてしばしたびなるところにあるにものしてつとめて

「けふだにのどかにとおもひつるを便[び]なげなりつればいかにぞみには山[六]

四ナシ

五ところ

六ナシ

がくれとのみなん」とあるかへりごとにたゞ

おもほえぬかきほにをればなでしこのはなにぞ露はたまらざりける 一

などいふほどに九月になりぬ。つごもりがたにしきりて二夜ばかりみえ

ぬほどふみばかりあるかへりごとに

きえかへりつゆもまだひぬ袖のうへにけさはしぐるゝそらもわりな

し 二

たちかへりかへりごと

おもひやる心のそらになりぬればけさはしぐるとみゆるなるらん

とてかへりごとかきあへぬほどにみえたり。又ほどへてみえおこたるほ

どあめなどふりたる日「くれにこん」などやありけん

かしはぎのもりのしたくさくれごとになほたのめとやもるをみるみ

る

かへりごとはみづからきてまぎらはしつ。

一 後拾遺戀二 入道攝政九月ばかりの事にやありけん夜侍りてとめられしつてにふるみおこせてけるかは返事にしてけるつけ

二 ○續拾遺戀四 右近大將道綱の母しのぐもとよりしなくなりぬ空もわたりし遣したる返事申しけるに

（第四句「けさやしぐれと」）

かくて十月になりぬ。こゝにものいみなるほどを心もとなげにいひつつ

なげきつゝかへすころもの露けきにいとどそらさへしぐれそふらんかへしいとふるめきたり

おもひあらばひなまし物をいかでかはかへすころものたれもぬるらん

とあるほどにわがたのもしき人みちのくにへいでたちぬ。ときはいとあはれなるほどなり、人はまだみなるといふべきほどにもあらず、みゆるごとにたゞさしぐめるにのみあり、いとこころぼそくかなしきことものに似ず。みる人もいとあはれにわするまじきさまにのみかたらふめれど、人のこゝろはそれにしたがふべきかはとおもへばたゞひとへにかなしうこゝろぼそきことをのみおもふ。いまはとてみないでたつ日になりてゆく人もせきあへぬまであり、とまる人はたまいていふかたなくかなしき

○後拾遺雜二
人道遺
が擬夜
なり侍
頃れ
おはりけ
ひりに
ひけに
ばてい
云侍れ
る
○新勅撰
神無月
の
二つ
女
遺
た
ち
の
懸
け
ば
て
い
る
な
こ
と
し
せ
ど
く
侍
り
け
に
な
ば
し
と
遺
た
き
せ
し
ち
月
撰
し
れ
せ
け
ば
て
い
れ
り
ち
懸
い
に
い
に
懸
ら
へ
夜
し
の
ば
し
と
遺
た
き
せ
し
ち
月
撰
し
れ
せ
け
ば
て
い
れ
り
ち
懸
る
へ
夜
し
の
ば
し
と
遺
た
き
せ
し
ち
月
撰
し
れ
せ
け
ば
て
い
れ
り
ち
懸
野
小
町
古
て
衣
た
き
せ
し
ち
月
撰
し
れ
せ
け
ば
て
い
れ
り
ち
懸
（
今
ぞ
を
ま
時
め
け
に
の
懸
け
ば
て
い
れ
り
ち
懸
小
ぬ
か
の
は
て
る
女
つ
二
る
云
侍
ひ
に
け
に
夜

三は

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com